

## 医療安全文化の QOL ---医療安全の新たな目標としてのウェルビーイング医療

酒井亮二

国際医療安全推進機構(MSPO)理事長

国際医療リスクマネジメント学会(IARMM)理事長

21世紀当初、不適切な医療行為による患者死亡、患者取り違え、手術部位の間違えなど誰にでも起きえるヒューマンエラーを撲滅するという医療安全文化の勃興は、今、世界的な進展にある。かつては患者安全(patient safety)の単語もなかったドイツ、フランスなどの欧州各国でも最近では医療安全文化が雨後の筍のように繁殖し始めています。南米、中近東では万人参加者による大規模な医療安全の学術総会も年々開催されています。

このような状況下で、医療安全文化の最終目標がヒューマンファクターの撲滅だけでよいのだろうかを考える時期に差し掛かってきました。翻ってみれば、不適切な医療行為は「人は誰でも間違える」というヒューマンエラーだけとは言えない。

未熟な侵襲手技によるみじめな身体損傷、生活改善によって治癒する病気に対する投薬のみの果てしない永続的治療行為、患者の生活を無視した医療行為、患者に対するパワハラ行為、等々。医療事故に遭遇した医療者の自殺者は米国では膨大な数が年々報告され、医療者による院内暴力禁止法案も最近制定された(workforce safety 法)。これらは明らかにヒューマンエラーではない。これらの有害な医療文化も医療の安全を脅かしている。

これらの有害な医療文化の根底には、医療安全文化の QOL 問題が存在する。つまり、医療安全文化の日常での質が問題と考えられる。

間違っていなければ良いだろうというヒューマンエラー対策による医療安全文化だけではなく、より質の高い日常の医療安全文化とはウェルビーイング医療(良好な医療)であると言いきえる。患者中心の医療、高い医療倫理・モラル、加療苦痛の軽減、不安全行動の改善、働きやすい労働環境の整備、等々はウェルビーイング医療の一端として既に存在しています。

以上の経緯から、医療安全文化の新たな目標としてウェルビーイング医療のあり方を国内外で皆さんと共に展開してまいる次第です。国際学会としては25年5月1日~2日にパリ会議でこの課題も取り入れ、すでにフランス、ドイツ、米国、イギリスから演題が集まり始めました。日本の皆さんの国際的な熱い論議を期待しております。

<http://www.iarmm.org/12WCCS/>

<http://www.iarmm.org/J/Wellbeingsafety2024/>